

# 国内におけるカワラヒワ救護の実態

鈴木 創<sup>1\*</sup>

## The actual situation of the rescue of the Oriental Greenfinch in Japan

Hajime SUZUKI<sup>1\*</sup>

1. 小笠原自然文化研究所（〒100-2101 東京都小笠原村父島西町）

Institute of Boninology, Nishimachi, Chichijima, Ogasawara, Tokyo 100-2101, Japan.

\* hajime@ogasawara.or.jp (author for correspondence)

### 要旨

オガサワラカワラヒワ生息域外保全の議論では「内地動物園における近縁種の飼育（飼育・繁殖技術の開発）」の必要性が確認された。同時に、近年の国内動物園における飼育事例が少ないことや、上野動物園の飼育のための許可に基づく捕獲でも近年は例がないことが明らかになった。また、繁殖地保全で必須とされるネズミ対策において、オガサワラカワラヒワの殺鼠剤毒性耐性の知見を得るためにも、近縁種の死体等の必要性も明らかであった。小笠原自然文化研究所では傷病野生鳥獣に携わってきた経験から、国内の傷病野生鳥獣等の実態を調査するとともに、その結果から重要と考えた保護・救護施設、団体、担当部署・個人等にヒアリングを実施した。

### キーワード

*Chloris sinica*、殺鼠剤毒性耐性、飼育個体、傷病鳥獣

### 1. 目的

オガサワラカワラヒワ生息域外保全に関する専門家ワークショップ(2020年9月22日)、域外ワーキンググループ2.0(2020年10月4日)では、「内地動物園における近縁種の飼育(飼育・繁殖技術の開発)」の必要性が確認された。さらに、ワーキンググループの中で、近年の国内動物園における飼育事例の少なさが明らかになり、動物園自身の捕獲において飼育個体群を早急に補強することが困難な実態が判明した(ペア以上の飼育は、上野動物園で2ペア、豊橋総合動植物公園で1ペア。上野動物園の飼育目的の許可に基づく捕獲では、近年捕獲例がない)。また、同専門家ワークショップで、野生個体群の立て直しのために必須とされた繁殖地のネズミ対策において、オガサワラカワラヒワの殺鼠剤毒性耐性の知見が重要であり、現時点の最善の方法は、近縁種による同知見を入手することとされた。

小笠原自然文化研究所では、父島・母島などで15年以上にわたり傷病野生鳥獣保護（東京都委託／鳥獣保護員との協働）に携わってきた。この経験から、飼育個体群のソースとして、全国の野生鳥獣救護の現場に可能性があると考えた。また、小笠原諸島におけるネズミ対策において、非対象種（保全対象種）の殺鼠剤への毒性耐性を見るために、傷病野生鳥獣保護に伴い回収される希少種の死体（アカガシラカラスバト・オガサワラオオコウモリ・オガサワラノスリ等）から必要とされる検体提供（臓器）に作業協力してきた経験から、同様に全国で回収されるカワラヒワの死体（落鳥個体等）が、耐毒性サンプルの入手につながる可能性を考えた。

## 2. 方法

2020年10月29日～11月11日に国内の傷病野生鳥獣保護におけるカワラヒワの保護事例について、北海道・東北・関東で報告されている統計資料等の文献調査および電話取材等（約15件）を行った。また、小笠原自然文化研究所における傷病野生鳥獣保護の対応経験から、統計資料等では見えない、実際の保護状況を把握する目的で、地域の主要な傷病鳥獣保護施設、団体、個人等に、ヒアリングを実施した。

## 3. 結果

国内の傷病鳥獣の文献調査（環境省：鳥獣関係統計、各県や市の傷病鳥獣保護報告）および、各県市窓口への問い合わせから、カワラヒワ保護事例は神奈川県と北海道に集中していることが明らかになった。特に横浜市を中心とする神奈川県の傷病鳥獣対応における件数が多く、北海道では、オオカワラヒワ、カワラヒワ両種の保護事例が認められた。なお、近年、関東圏の東京、千葉等の主要な傷病鳥獣機関では、カワラヒワの保護事例はほぼ認められず、死体回収も僅かだった（詳細は付録を参照のこと）。これらの結果について、オガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップの域外ワーキンググループへ、基礎資料として持ち込むとともに、オガサワラカワラヒワの保護増殖計画の立ち上げ準備をしている環境省小笠原自然保護官事務所に情報提供した。なお、死体を活用した耐性毒性検査等を実施には、現場の作業負担の大きさという課題<sup>\*</sup>があることから、耐性毒性検査等の実現には、公共機関間での委託等、予算を伴う正式な事業連携により進めることが必要というコメントも付け加えた。

<sup>\*</sup>適切な検体取得には、死亡直後のサンプル採取等さまざまな条件があり、同条件を満たすためには、現場負担が非常に大きい作業となっている。

## 4. 謝辞

日本本土におけるコカワラヒワ、オオカワラヒワの傷病鳥獣情報について、とくに、以下の組織および諸氏にお世話になった。厚く御礼申し上げます。ウトナイ湖野生鳥獣保護センター・山田智子獣医師、神奈川県自然環境保全センター・和泉屋公一獣医師、行徳野

鳥観察舎友の会、NPO 法人自然環境アカデミー・野村亮氏、かながわ野生動物サポートネットワーク・葉山久世獣医師、WRV 神奈川野生動物リハビリテーター・大坪奈古氏、ほか沢山の方々。

## 付 録 国内のカワラヒワの救護事例についてのヒアリング結果

- 1) ウトナイ湖野生鳥獣保護センター 北海道苫小牧市  
施設：苫小牧市と環境省の共同運営  
ヒアリング対象者：環境衛生部環境生活課 山田先生
  - ・カワラヒワは毎年保護事例（ヒナを含む）がある。オオカワラヒワも保護事例がある。
  - ・「餌を食べない。餌付きにくい」という印象がある。
  - ・傷病野生鳥獣 160 例中 2～3 例の印象。
  - ・1 月、3 月、5 月に保護される印象がある。
  - ・死亡個体は状態が悪ければ焼却しており、保管はしてない。
  - ・協働については、委託など実務や予算の付加された正式な申し入れが、環境省などからあれば検討可能。協力要請等の範囲で、通常業務で自主的な作業協力をするのは難しい。
  
- 2) 神奈川県自然環境保全センター 自然保護課  
施設：県立施設  
ヒアリング対象者：和泉屋先生およびスタッフの方
  - ・過去 10 年で 56 件（受け入れ時の死亡個体含む）
  - ・今年度 4 件（2015 年 18 羽／2014 年 16 羽／2013 年 20 羽など）
  - ・個体個体にあわせて、ベストな餌で育てている。
  - ・配合飼料のむき餌や、フォーミュラを使用している。
  - ・若鳥では、動物質も与えている。
  - ・放鳥（野生復帰）できない鳥は、リハビリテーターに預けている。
  - ・今年度の放野は 1 羽。長期飼養の経験者もいるが詳細は不明である。
  - ・鳥まかせにすると、体重が落ちるので、モニターしながら餌を与える場合がある。
  - ・委託など実務や予算等の付加された正式な申し入れが環境省等からあり、協力条件が整っていれば検討可能かもしれない。ただし、協力要請レベルの範囲で（予算や実務補助がなく）、通常業務の中で自主的な協力をするのは難しい。
  
- 3) 行徳野鳥観察舎友の会（現：認定 NPO 法人 行徳自然ほごくらぶ） 千葉県
  - ・近年のカワラヒワの保護事例は、ほとんどない。
  - ・死体の保管もほとんどない。
  - ・保護回収事例が少ない理由は不明である。
  
- 4) NPO 法人 自然環境アカデミー 野村 亮さん 東京都福生市
  - ・カワラヒワが傷病鳥として保護されることは稀。ほとんどない。

- ・死体回収も多くはない。冷凍保存の死体はある程度ある。
- ・保護回収事例が少ない理由は不明。
- ・飼育は可能だが、繁殖は相当難しそうな感覚。

#### 5) かながわ野生動物サポートネットワーク 葉山久世先生

- ・横浜市で巣立ちヒナの保護が多い。
- ・カワラヒワは毎年保護事例があるはず。ヒナの保護もある。珍しくない。
- ・WRV 神奈川のリハビリテーターで、県や市保護の野生復帰不可能個体の長期飼養経験者がいる。
- ・関東近県、東北、甲信越で保護がないのが不思議。むしろ、ありふれすぎていて保護の対象にならないのでは？

#### 6) 大坪奈古さん（神奈川県横浜市在住 絵本画家・絵画講師 野生動物リハビリテーター） 日本国内で突出してカワラヒワの保護件数が多い神奈川県における長期の飼養経験者。葉山久世先生（かながわ野生動物サポートネットワーク）の紹介。

##### 大坪奈古さんからのカワラヒワの長期飼育に関するヒアリング

2008年10月5日から2019年2月1日（落鳥）まで、カワラヒワの傷病保護個体を飼育した。開放骨折で野生復帰の見込みのないカワラヒワを、神奈川県自然環境保全センター（厚木市七沢）より引き受けた。当時、大坪さんはWRV 神奈川の野生動物リハビリテーターで、加藤千晴先生担当時代の2～3年間、頻繁に同センターに通っていた。

- ・飼養開始時、カワラヒワ成鳥 19.5 g おそらく♂ 骨折により片翼が落ちてた。
- ・2008年10月5日 野生復帰不可能と判断された保護鳥を引き取り飼養した（大坪、2017）。
- ・足環装着許可証 14B ア 1805 / 飼育登録 厚木市長
- ・WRV 神奈川：野生動物リハビリテーター
- ・上野動物園で東京動物園ボランティアーズに登録し、時々通っていた。

##### 飼育スペース、人との関係

- ・引き取り時は、竹カゴ（メジロカゴ）。
- ・1週間程度は興奮し、激しく威嚇し、バタつく状態だった。
- ・夜間、鳥カゴにブラインドとして掛ける布を、食い破る勢いだった。
- ・ゆっくりと話しかけるなどしているうちに、1週間をすぎてから、次第に落ち着いた（人のテンションが敏感に伝わる感じがした）。
- ・バタつかなくなってから、普通の鳥カゴ（30cm×30cm×30cm程度）に移した。

- ・人の飼育環境下のストレスを取り除くように、ゆっくり、積極的に人に馴れさせた。
- ・鳥カゴに入れた後、ケージに指を入れるなどするうちに、指をまたぐようになった。
- ・12月（受け入れて3ヶ月弱）には、手に乗るようになった。
- ・馴れたら、さらに大きい鳥カゴ（45cm×35cm×45cm程度？）に移した。
- ・手乗りになってからは、鳥カゴから出して、よく室内等で遊ばせた。
- ・人に馴れた以降は基本的に興奮したり、バタついたりすることはなくなった。
- ・1度、ネコが部屋に入ったことがあり、この時のみバタついた。
- ・天気の良い日に、屋外に鳥かごを出すと、活発に鳴くなどした。
- ・時折、野生のカワラヒワも飛来して、鳴き交わした。
- ・飼育途中から、人の話し声に、「キュッキュッ」と鳴いて応えるようになった。
- ・屋内で自由にすると、手→肩→頭など動き回るようになった。
- ・カゴに入れての外出もした。自然の中にカゴをおくと、盛んに鳴くなど活発になった。
- ・絵画教室（横浜周辺、横浜→東京）にカゴで連れ出し、モデルにした。デッサンをする子供の手に1度のせてから、デッサンをさせた。それほど馴れて落ち着いていた。
- ・鳥カゴの中の、止まり木は上下2本。
- ・水入れを、上と下（平たいスペース）の2カ所に置いた。
- ・水入れに糞が入るので、入りにくい場所に、水浴び用の平たい容器を置いた。
- ・夏の暑さ対策として、よく霧吹きで水をかけてやった。良かったかどうかわからないが、小刻みに翼を震わせて浴びており、逃げることはなかった。
- ・手に乗るようになった直後、家族が自作した針金のブランコにも乗って遊んだ。

## 餌

- ・引き取った後、ミルワーム4本/日（ビタミン剤漬け）を食べていた。
- ・主要な餌は、麻の実+ボレー粉（必須の定番餌）、ミルワーム、ビタミン剤。
- ・麻の実より油の少ないカナリアシードを勧められて与えたが、麻の実を好んで食べていた。
- ・アワ、ヒエの穂も（吊った状態で）与えた。
- ・ヒマワリの種子を、剥いた状態で与えていた事もある。
- ・野菜は小松菜が好物だった。手に入らない時には、チンゲン菜、キャベツ、サラダ菜も与えた。菜っ葉入れに立てて与えた。キャベツで代用する事が多くサラダ菜は自家菜園のものであった。
- ・ミカンも好きで、リンゴよりよく食べた。すりつぶすように食べていた。
- ・ピラカンサスの実が好物で、近所からも集めて、連日大量に与えたことがあるが、この際に足の先がブヨブヨとむくんだことがあり、以降大量にやることはやめた。

## 換羽

- ・掃除の時に羽根を拾うことがあった。
- ・よく落ちている時期（濃淡）があったように思うが、実際と時期等も定かでない。

## 怪我から衰弱

- ・2016年、引き取ってから8年目、とまり木から落ちて、片足が伸びて、足の指は丸まって立てなくなり、非常におびえてバタついた。加藤千晴先生の紹介でグローバル動物病院・広瀬先生/横浜市を受診した。骨折はしていないが神経の問題との診断で、足指をテーピングで開いて固定してもらったら、歩けるようになり、落ち着きを取りもどした。
- ・抗生剤の処方を受けながら、よく生きたが、年とともに次第に足が悪くなり、足の指先が欠けて丸くなる、からだ全体で毛が薄くなるなどしてきた。また、糞が足に付いて固まるなどするようになり、お湯で溶かしてとってやるようになっていた。

## その他

- ・感情が豊かで驚いた。人にもよく反応した。
- ・音に驚くことがあったかもしれない。
- ・冬季には一時的にヒーターを入れてやることもあった。



図1. 大坪奈古氏によるカワラヒワのイラスト  
Figure 1. Oriental Greenfinch drawn by N. Ohtsubo

## 7) ネット情報

YAHOO!JAPAN 知恵袋 (2007)、Pet Pedia (2021) を参考にした。

引用文献

大坪 奈古 (2017) カワラヒワの月見. 特定非営利活動法人 野生動物救護の会 RUNNER  
28: 12-13.

Pet Pedia (2021) 意外と身近な野鳥「カワラヒワ」はペットとして飼える? その生態を紹介.  
[https://petpedia.net/article/819/oriental\\_greenfinch#toc-114](https://petpedia.net/article/819/oriental_greenfinch#toc-114) (最終閲覧日: 2021年9月30日)

YAHOO! JAPAN 知恵袋 (2007) カワラヒワの餌 (牛脂や好物について) についての質問.  
[https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\\_detail/q1113234846](https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1113234846) (最終閲覧日: 2021年9月30日)

**SUMMARY**

The actual situation of the rescue of the Oriental Greenfinch in Japan

Hajime SUZUKI<sup>1\*</sup>

1. Institute of Boninology, Nishimachi, Chichijima, Ogasawara, Tokyo 100-2101, Japan.

\* hajime@ogasawara.or.jp (author for correspondence)

The workshop confirmed the need for "captive breeding of Oriental Greenfinch in zoos". It also became clear that there are few examples of captive breeding of Oriental Greenfinch in zoos. For rats control in their habitat, rat poison toxicity resistance for the Oriental Greenfinch is needed to be examined, and samples for analysis were needed. The institute of Boninology(i-Bo) has been engaged in wildlife rescue. Based on our experience, we thought it would be useful to conduct a survey on the actual situation of the rescue of the Oriental Greenfinch in Japan. Therefore, we conducted interviews with important rescue facilities.

**Key words**

Breeding individuals, *Chloris sinica*, Injured wildlife, Rat poison toxicity resistance